

『小二教育技術』一九六〇年十二月号（小学館）

成績通知の一つの提案

子どもの成績を正しく見るには

成績絶対視の弊害を打破しよう

矢口 新

成績通知というときすぐ54321を思い出す。昔は甲乙丙という記号だったが、どっちにしても大してかわりはない。その雰囲気は明治の初期のものである。そして現代ではもう百害あって一利もないものである。しいていえば劣等感を養成するのに役立つというべきであろうか。

しかしこういうものをありがたがる迷信は大へん根が深いようである。それは日本人全体の教育観や人間観に根ざしているようである。学校教育者がよほどの識見と信念をもたなければ、打破することはできない。

現在学校では子どもは絵を一枚かいてもすぐ一つ丸や二つ丸をつけられる。みんなが二つ丸をもらって、自分が一つ丸だったら俺は絵はだめなんだという確信をもつであろう。六年間それをやられれば大抵すっかりした子どもでもノイローゼになる。今の大人はそうして育てられたかたわ者が多い。けれどももっと大事なことは、その一つ丸や二つ丸が、なんにも物語りはしないということである。何がなんだかわからないで丸が一つだったり、二つだったりしている。これでは

子どもはのびようがないということである。家へもってかえっても親もよくわからないからお前は絵が下手なんだなといわれるだけだ。もっと上手にかきなさいなどといわれる。なんというばかげたことだろうか。それでは子どもがのびるすべがない。たまには目のある親もいるかもしれない。二年生ぐらいの子どもの描く絵は大体どのくらいか、その標準からみて、お前はこういう所をこういう風に描いたらよいなどと注意すればそれは大したものである。そういう親がいれば一つ丸とか二つ丸とかは問題にしないであろう。しかしそういう親はまあいない。自分も絵は劣等だなどと思っているのが多いから、丸だけを問題にする。先生もそういう親が多いことを知っているから、丸にたよって親をおどかして、子どもをおどかす。

成績通知というのは、皆この類である。いかに科学的であるかの如くよそおいをしてもその根本が教育からはずれているのだから、話にならない。あれはもつとも悪い標本である。正常分布とか何とか曲線とかむずかしいことをいってごまかしているだけである。そういうもので自分の子どもの成績を問題にして、いいとか悪いとか言っても、子どもが実際にどうなっているのかは何もわからない。それで子どもを親が教育しようと思うのがおかしい。そういう泥沼の中へ入って、子どもを見ないで、それで子どもをよくしようなどと考えているのは、笑い話にもならない。

そういうわけのわからない親が多すぎる。だから何だかわからないが子どもにただ勉強しろといったり、よい先生につければ子どもがよくなると思ったり、よい学校へ行けば子どもがよくなると思ったりして、さわぐのである。しかしその場合も、子どものどこがどうだからどうしようということとはよくわからないから、ただ右往左往しているだけである。おめでたい日本の親は、そういう苦労が親の苦労だと思

っている。まことに日本の親は未開発である。

教師もまた多分にこの上にあぐらをかいている傾向がある。今教師のなすべきことは、親に子どもを具体的に見る目を与えてやることである。愚民政策をとって、親を馬鹿にしておくことを考えていては災難はわが身にふりかかるであろう。

私は今までの形式の通知表は全廃したらよいと思う。そのかわり、絵をかいたらそれをクラス全体のをまとめて、その都度親にまわす。こんどは、コンポジションというねらいで見てくれ。あなたがたのお子さんは、それでどれくらいか、みんなのと比較もしてくれというように。それぞれのこどもはそれぞれ特色があるから、それをみるように指示しておく。

これは何も絵にかぎらない。国語や算数はテストをしたら、それをクラスのをまとめて回覧する。その時、ちゃんと見るねらいをつけておく。親は子どもの何がどう出来るか出来ないかがわかるであろう。一年の終りには、自分の子どもの成績物を一人一人全部まとめて、いろいろ検討するようにしたらよい。クラスの中で何番目にいるなどということに關心をもつことはおよそ馬鹿げたことだということになるであろう。

アメリカの心理学者の研究によると、一つの学年の子どもでも様々な能力の方面において、その程度の違いには四年間から八年間位の巾があるといわれている。これはもう程度の差ではなく、むしろ個性のちがいである。そういう点から、個々別々に指導をするティーチングマシンという概念も出て来ている。ここ二、三年の間にアメリカの教育はすっかり体質改善をとげるのではないかと見られている。そういう時代に、生徒を五十ば一とからげにして、漠然と成績のよい子悪い子などといっているのは、人間育成になるまい。もうここらで、教師

も目ざめる必要があるのではないか。そして親に子どもを見る目を与えてやってほしい。

(国立教育研究所)